

中期経営計画

重点戦略④ ストレス耐性を意識した市場運用・ リスク管理の深化



専務執行役
笠間 貴之

収益性と健全性の高次元での 両立を目指して

これまで当行では、世界的資金余剰や低金利の継続といった厳しい運用環境が長引くことを念頭に、分散投資による新たな収益基盤を整備するなど、運用の高度化・多様化を進めてまいりました。

中期経営計画期間においては、高度なリスク管理態勢に基づいて一貫性のある投資判断を継続しながら、地域・業種なども分散させ、将来、市場が乱高下する状況下においても健全性を維持できる堅牢な運用ポートフォリオ構築を目指してまいります。そしてその実現のために、これまでに構築した体制やノウハウをさらに充実・向上させ、収益性と健全性の高次元での両立を目指し、専門的人材の育成、リスク管理態勢の高度化等に努め、より一層洗練された運用態勢を構築してまいります。

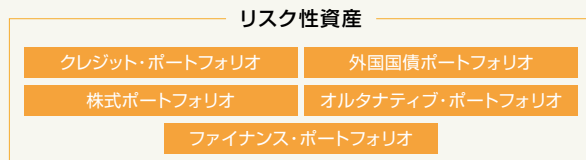
また、責任ある機関投資家としての立場から、持続可能な社会の実現に向けて貢献してまいります。

2020年度の成果

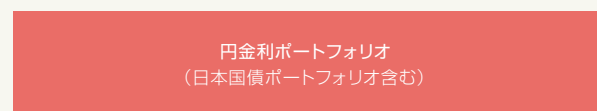
国内の低金利環境が継続し、世界経済の先行き不透明感が高まる中、安定的な収益確保のため、適切なリスク管理のもと、国際分散投資を進めました。リスク性資産は外国証券を中心にクレジット・クオリティ（投資先の信用力）に配慮しつつ積み上げたほか、戦略投資領域と位置づけているプライベート・エクイティファンド（成長が

見込まれる未上場企業等へ投資するファンド）、不動産ファンド等への投資を、市場環境の変化を踏まえて選別的に実行しました。2020年3月末に84.8兆円だったリスク性資産残高は、2021年3月末には91.1兆円まで増加しました。うち戦略投資領域残高は4.2兆円となっています。

ポートフォリオの枠組み



リスク性資産の運営については、国際分散投資等により主に信用・市場リスクを取って売買益を含む収益の積み上げを図ります。リスク性資産は、主として円金利ポートフォリオからの借入により資金を調達しています。



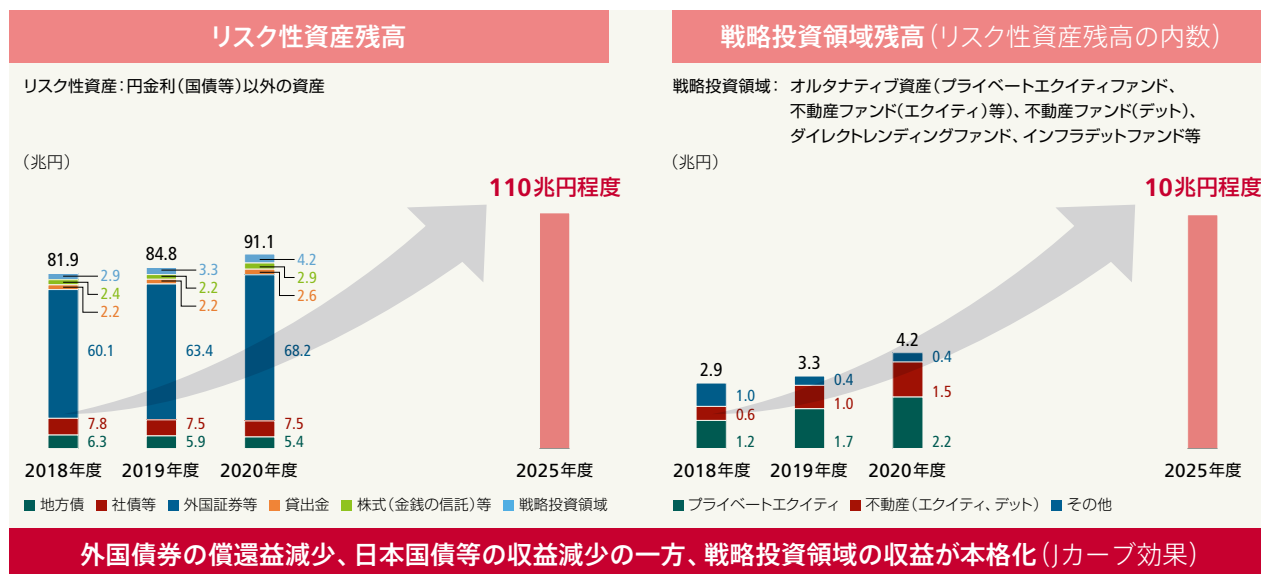
円金利ポートフォリオは、国債運用などにより主に金利リスクを取って安定的収益の確保を目指すポートフォリオです。



低金利が継続する厳しい経営環境の中、「リスクアペタイト※・フレームワーク」に基づき、取得するリスクの種類や水準を明確にした上で、リスク対比リターンを意識しつつ、収益性の向上を目指して国際分散投資を拡充していきます。

※ リスクアペタイト(自社のビジネスモデルの個性を踏まえた上で、事業計画達成のために進んで受け入れるべきリスクの種類と総量)を、資本配分や収益最大化を含むリスクテイク方針全般に関する銀行内の共通言語として用いる経営管理の枠組み。

具体的には、投資適格領域を中心にリスク性資産残高を積み上げていきます。また、リスク性資産のうち、戦略投資領域については、選別的に投資を進め、残高の拡大を目指していきます。



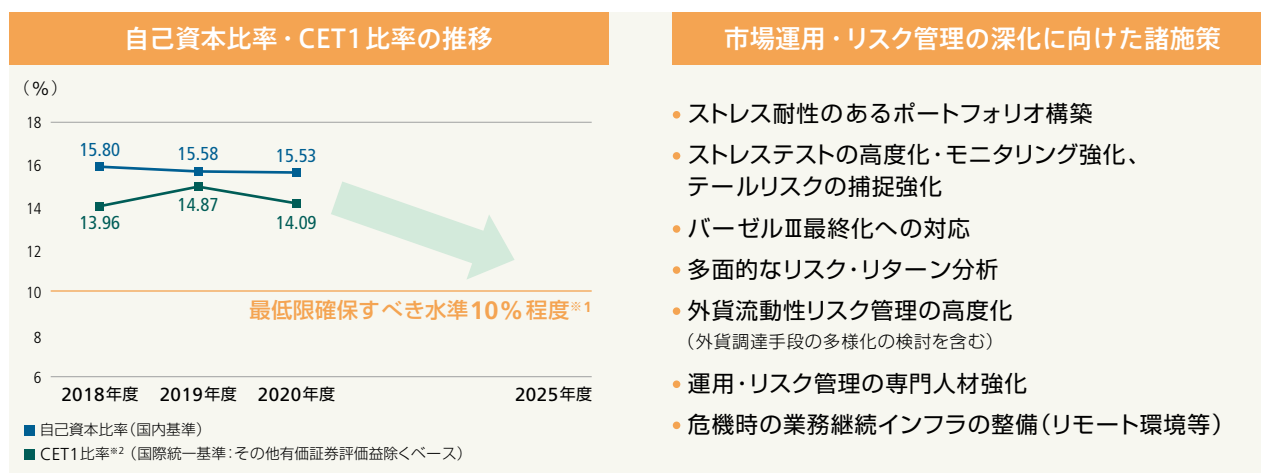
上記方針のもと、国際分散投資を拡充し、2025年度末にはリスク性資産残高110兆円程度、戦略投資領域残高10兆円程度を見込んでいます。

ACTION ストレス耐性の強化・リスク管理の深化

適切なリスクテイクによる収益向上

ストレス事象発生に備え、ストレス耐性のあるポートフォリオ構築を進めるとともに、ストレステストの高度化やモニタリングの強化等、リスク管理の深化に一層努めていきます。自己資本比率(国内基準)10%程度、CET1比率

10%程度^{*1}を平時に最低限確保すべき水準に設定。財務健全性を十分確保しながら、資本を活用し、適切なリスクテイクによる収益向上を図っていきます。



※1 CET1比率は、その他有価証券評価益除くベース、2025年度はバーゼルⅢ完全実施ベース。

※2 当行は国内基準行であるものの、国際分散投資拡大に伴う、国際金融システム上の重要性の増加等を踏まえ、国際統一基準であるCET1比率の目標も設定する。